関東における伝統工芸の原材料と産地に関する研究

The Relationship between Raw Materials and Producing Areas of Folk Crafts in Kanto District

丸谷 耕太* 土肥 真人* 杉田 早苗*

Kota MARUYA Masato DOHI Sanae SUGITA

Abstract : This study focused on traditional crafts manufactured in Kanto district and investigated the relationship between raw materials used and the origins of these materials. Analyses revealed that more than half of the traditional crafts are made from the raw materials transported from areas outside. A proportion of crafts relying solely on supplies from their local areas has decreased to none. While artisans who has been using the raw materials all supplied from outside since establishment were more flexible in where the raw materials come from, artisans who had previously obtained the raw materials within their local areas expressed needs for obtaining raw material within their locals. These results suggested a necessity of separate policies differing in raw material supplies at establishment, and a necessity to expand and improve production network for conservation of skills of traditional crafts.

Keywords: Traditional Craft, Row Material ,Producing Areas, Cooperative Association

キーワード : 伝統的工芸品, 原材料, 産地, 組合

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

伝統工芸は、重要な地場産業として、固有の技術とともに各地で長年にわたって継承されてきた。20 世紀後半の高度経済成長期以降、伝統工芸に対しては産業振興と地域経済発展の観点から様々な支援策が講じられてきた。しかし、安価な代替物の登場や原材料の入手難等、産業の観点からは現在も多くの問題を抱えている。一方、伝統工芸の生産活動は文化的景観の要素と認識され¹⁾、活動の場としての産地の風景は文化的景観として捉えられ始めた²⁾。原材料を生産するための森林や畑といった自然の風景、陶磁器を生産するための登り窯が集まる集落といった生産工程が作り出す風景等、伝統工芸は目に映る地域特有の景観を作り出しているといえよう。さらに、地域で採れる自然の原材料を用いることの多い伝統工芸は、近年の SATOYAMA イニシアティブ等で注目

される、二次的自然環境の保全と持続的な地域資源の利用という新たな視点から注目すべき対象だと考えられる。

このように、新たな観点からの伝統工芸の再検討により伝統工芸の維持や支援策に新しい方向性が提示されることが期待できる。そこで本研究は、持続的な地域資源利用と文化的景観保全の観点から支援策を検討するうえでの知見を得るため、伝統工芸の生産工程を把握し原材料と産地の関係の変遷を明らかにし、それらに対する生産者の意識を明らかにすることを目的とする。

伝統工芸の産地に関する既往研究としては、伝統的工芸品の地域振興への利用を論じた研究³⁾⁴⁾⁵⁾、産地形成や構造の分析を行った研究⁶⁾⁷⁾⁸⁾がある。また、循環型地域モデルに関する研究は多数ある⁹⁾¹⁰⁾が、持続的な地域資源利用や文化的景観の保全に視点を置いた研究は管見では見当たらない。

(2) 研究の対象

全国では 1275 品目の伝統工芸が確認されているが¹¹⁾、本研究では、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（以下、伝産法）によって指定されている工芸品 210 品目のうち関東地方に存在する 25 品目を対象とする（表-1）。

(3) 研究の方法と構成

工芸品の材料には原材料と中間生産物の 2 種類がある。本研究では、自然から直接とれる材料を原材料、原材料が加工されて材料となるものを中間生産物と定義し、分析を行う。

まず、産地に関する論理と施策の変遷を整理し、つぎに、本論の対象とする伝統的工芸品について、指定時に産地組合が作成した申出書¹²⁾を調査資料として工程図を作成し¹³⁾、産地の分業の類型化を行い¹⁴⁾、用いられる原材料及びその原材料の産地内調達の有無を調査する。さらに、経済産業省により伝統的工芸品の認定を受けた産地組合にアンケート調査を行い（表-2）、指定時から現在までの原材料の変化を把握し、変

表-1 調査対象の概要

ID	品名	都道府県	種類	指定年	企業総数	従事者数	年生産額 (百万円)
①	結城紬	茨城県、栃木県	織物	1977	343	517	1070
②	笠間焼	茨城県	陶磁器	1992	284	400	2000
③	真壁石燈籠	茨城県	石工品	1995	201	1094	7000
④	益子焼	栃木県	陶磁器	1979	360	800	3000
⑤	伊勢崎餅	群馬県	織物	1975	29	1103	600
⑥	桐生織	群馬県	織物	1977	261	1755	4714
⑦	春日部桐草蓆	埼玉県	木工品	1979	12	48	400
⑧	江戸木目込人形	埼玉県、東京都	人形	1978	35	1150	2700
⑨	岩槻人形	埼玉県	人形	2007	160	1040	9270
⑩	房州うらわ	千葉県	竹工品	2003	6	70	58
⑪	村山大島紬	東京都	織物	1975	25	90	50
⑫	本場黄八丈	東京都	織物	1977	62	65	88
⑬	多摩織	東京都	織物	1980	85	226	2001
⑭	東京染小紋	東京都	染色品	1976	23	94	524
⑮	東京手描友禅	東京都	染色品	1980	80	112	500
⑯	江戸指物	東京都	木工品	1997	25	36	200
⑰	江戸和竿	東京都	竹工品	1991	34	120	450
⑱	東京銀器	東京都	金工品	1979	103	237	1480
⑲	江戸節句人形	東京都	人形	2007	41	163	3362
⑳	江戸からかみ	東京都	染色品	1999	13	84	1000
㉑	江戸切子	東京都	その他	2002	78	135	900
㉒	江戸木版画	東京都	その他	2007	60	120	5000
㉓	鎌倉彫	神奈川県	木工品	1979	72	187	954
㉔	小田原漆器	神奈川県	木工品	1984	11	29	150
㉕	箱根寄木細工	神奈川県	木工品	1984	36	119	567

表-2 アンケート調査概要

調査日時	2010年2月～3月
調査対象	関東の伝統的工芸品の産地組合
回収率	22/25(88%)
調査項目	指定時から現在までの原材料の変化 今後の産地の動向 原材料の変化に対する意識

*東京工業大学大学院社会理工学研究科

化に対する各産地の意識を分析する。最後に総合的考察を行う。

2. 伝統工芸と産地に関わる考え方及び施策の変遷

1974年に制定された「伝産法」は日本で初めて二次産業に関わる産地を指定し地域的に支援を行った。その後、産地は一定の産業集積地と認識され、1997年の「特定産業集積の活性化に関する臨時措置法」まで、その対象を拡大しながら産業支援がなされてきた。産地の捉え方についても、清成忠男は産地の特徴として、地域的な企業集団・社会的分業・在来産業または在来化した外来産業からの発展・伝統的に経営資源が蓄積されてきた消費財の特産品工業を挙げているが¹⁵⁾、伊賀光屋は共同体や伝統の存在それ自体は産地の要件とは考えないと主張している¹⁶⁾。

一方、2001年の「伝産法」改正により、産地としての伝統工芸は地域振興に貢献する産業や環境に優しい産業として位置づけられると共に、2005年の改正文化財保護法による文化的景観の保護が提唱され、産地は文化的景観としても認識され始めた。同時に、SATOYAMA イニシアティブに代表される自然共生型社会を目指す動きの中で自然資源の伝統的な利用法の再評価が進んでいる。

3. 伝統的工芸品の原材料

(1) 生産工程の類型(図-1)

伝統的工芸品を生産工程の分類に従い整理すると、垂直型・垂直+α型・水平型・垂直水平併合型という計4種に類型化される。垂直型は14品目と最も多い。垂直+α型は5品目あり、水平型は3品目であり、垂直水平併合型は4品目であった。

(2) 原材料と産地

伝統的工芸品に使用される原材料と産地内での生産の有無を工芸品の種類ごとにまとめた(表-3)。原材料の多寡は各工芸品によってそれぞれだが、種類ごとにみると、木工品は多種の木材を利用しており、人形はその部品の多さから様々な原材料を利用する傾向にある。原材料と産地の関係を見ると、全ての原材料を産地内でまかなっている工芸品は存在しない。産地内と産地外の原材料を併用している産地は12ヶ所あり、残りの13ヶ所の産地は全ての原材料を産地外から仕入れて製造を行っている。

表-3 伝統的工芸品の原材料

ID	工芸品名	種類	草・樹	土・石	鉱物	動物	その他	合計
①	結城紬	織物	1					1
⑤	伊勢崎餅		7 (1)				3	10 (1)
⑥	桐生織		2 (2)		2		1	5 (2)
⑪	村山大島紬		3 (1)				1	4 (1)
⑫	本場黄八丈		6 (5)	1 (1)				7 (6)
⑬	多摩織		8				1	9
⑭	東京染小紋	染色品	7 (1)				1	8 (1)
⑮	東京手描友禅		3				2	5
⑯	江戸からかみ		6		2		3	11
②	笠間焼	陶磁器	3 (3)	11 (10)			5 (3)	19 (16)
③	益子焼		3	9			5	17
④	真壁石燈籠	石工品		5 (3)				5 (3)
⑦	春日部桐箆箭		7 (3)	1	3	1 (1)		12 (4)
⑩	江戸指物	木工品	7	1				8
⑫	鎌倉彫		21	3	1		5	30
⑭	小田原漆器		5					5
⑮	箱根寄木細工		37			1	1	39
⑯	房州うちわ		8 (4)			1 (1)		9 (5)
⑰	江戸和竿	竹工品	8				2	10
⑱	東京銀器				20			20
⑲	江戸木目込人形	人形	7 (1)	4	2	2	3	18 (1)
⑳	岩槻人形		12 (1)		1	2	1	16 (1)
㉑	江戸節句人形		14 (2)		7 (2)	6 (1)	1 (1)	28 (6)
㉒	江戸切子			3				3
㉓	江戸木版画	その他	3					3
㉔	江戸木版画							3
合計			178 (24)	38 (14)	38 (2)	13 (3)	35 (4)	302 (47)
産地内で採れる割合			13.5%	36.8%	5.2%	23.1%	11.4%	15.6%

注：() 内は産地内で採れる原材料の数

(3) 中間生産物と産地

材料に占める中間生産物の割合を産地ごとにみると、30%未満の産地が10ヶ所ある一方で50%以上の産地は14ヶ所と半数以上を占める。特に染色品や人形、織物は割合が高い(表-4)。また伝統的工芸品における中間生産物は125種中91種(73%)が

産地外で生産されていることも明らかになった。

表-4 材料における中間生産物の割合

中間生産物の割合(%)	0-10	10-20	20-30	30-40	40-50	50-60	60-70	70-80	80-90	90-100	計
織物		1				1		1	2	1	6
染織品							3				3
陶磁器		2									2
石工品	1										1
木工品	2	1			1	1					5
竹工品		1						1			2
金工品	1										1
人形							2		1		3
その他			1							1	2
合計	4	5	1	0	1	2	5	2	3	2	25

4. 原材料の変化と組合の意識

(1) 指定時から現在までの変化

伝産法に指定された後に原材料に変化があった産地(表-5)は10ヶ所あった。全原材料302種中38種(13%)の原材料がこれらの産地で変化していた。そのうち、「使用しなくなった」ものが12種、「産地外で作るようになった」ものが15種、「新しい素材になった」ものが9種である。このような変化の要因としては、性質のよい原材料が生まれたこと、原材料の生産者の減少による入手難が指摘されている¹⁷⁾。また、工芸品を製作する際の技法に変化があったのは、春日部桐箆箭のヤシヤブシ¹⁸⁾のみであり、製品の質に変化があったのは春日部桐箆箭のイボタロウ虫とウツギの変化¹⁹⁾のみであった。他の工芸品に関しては、技法や製品の質を変化させずに対応していることが分かる。

表-5 指定時から現在までの材料の変化

ID	工芸品名	変化の内容	変化があった材料
②	笠間焼	使わなくなった 産地外で作るようになった 産地外または自分で生産するようになった 新しい素材になった	高級粘土、砂、馬淵磁石、石灰石 酸化鉄、二酸化マンガシ、酸化銅、土灰、木、黒石 炭灰、粉炭灰 第一合成ワラ、手練粘土・第一酸化鉄・弁焼
④	益子焼	新しい素材になった	寺山白土・天然陶石
⑤	桐生織	使わなくなった	真綿繭糸、絹糸、麻
⑦	春日部桐箆箭	新しい素材になった	イボタロウ虫・ババピン(☆)、ヤシヤブシ・大和産(★)、ウツギ・ミズメ(☆)
⑩	房州うちわ	産地内で作るようになった 産地外で作るようになった	柳枝 女竹、真竹、緑紙、胡粉、牡蠣
⑭	東京染小紋	産地外で作るようになった	型紙
⑮	江戸指物	産地外で作るようになった	漆 漆紙・合成紙・写真紙
⑰	江戸和傘	使わなくなった	大木竹、桑
⑱	東京銀器	新しい素材になった	ガラス繊維・カーボン、ガイドリールシート・カーボン
㉒	江戸切子	産地内で作るようになった	成形ガラス
㉓	鎌倉彫	使わなくなった 新しい素材になった	イチョウ、サワラ 新・木工用ボンド

(2) 各産地での原材料の変化

産地の成立時と伝産法への指定時及び現在の、全原材料における各産地内で採れる原材料の割合の変遷及び将来への意向は(図-2)のようになる。全ての産地外の原材料を一貫して使用し加工のみを行っている産地が半数あり(21ヶ所中11ヶ所)、将来の意向も全て現状維持である。

一方、残りの10ヶ所は産地内で入手可能な原材料を使用している。産地成立時には産地内で全ての原材料をまかなっていた産地は8ヶ所存在していたが、今ではその全てが他産地の原材料も一部利用している。将来への意向では現状の継続が望まれている。

(3) 産地や原材料に対する組合の意識

(i) 伝統的に使用されてきた原材料の変化

原材料について、「今後も変化してはいけない」と回答した産地が11件と最も多く、「一部の原材料は変わってはいけない」という意見は6件ある。これら歴史的な原材料を大切と考える産地が多い中、「原材料は変わってもよい」という産地も4件ある。工芸品の種類別に見ると、全ての織物は原材料の変化に対して否定的

図-2 産地内で採れる原材料の変遷と意向

であり、木工品の多くと竹工品は一部の原材料を大切にしている。

(ii) 原材料の調達先の変化

原材料の調達先について、「すべての原材料が変化してはいけな
い」と感じている産地は9件あるが、「原材料が同じであれば他産
地でもよい」という意見も同数ある。一方、調達先は「変わって
もよい」という意見は4件ある。産業種別の傾向を見ると、殆ど
の織物は原材料の調達先が変わってはいけなと感じているのに
対し、「変わってもよい」という意見は全て木工品であった。

(iii) 産地外の原材料への志向

産地外に良い原材料があれば「是非利用したい」または「ど
ちらかといえ利用したい」という意見が計16件ある。「利用した
くない」と答えた5件の産地に比べその数は多かった。織物や石
工品、竹工品は産地外の原材料の利用に消極的な傾向にある。

(4) まとめ

産地成立時には原材料を全て産地内で生産していた産地も時
代とともに産地外の原材料を利用するようになった(8ヶ所)。現
在も産地内で生産している織物等の9ヶ所の産地は産地外の原材
料の使用に抵抗を感じている。一方で、成立時から産地外のもの
を使用している木工品等の産地(9ヶ所)は産地外に良い原材料
があれば利用したいと考える傾向にある。

5. 総合的考察

関東地方の伝統的工芸品は、技術や製品の質を保ちつつも、伝
産法指定後に全体で13%の原材料が変化した。生産工程と原材料
の間や工芸品と産地組合の意識の間の強い相関は取れないが
(表-6)、産地成立時に産地内の原材料を使用していた産地は原
材料の変化に対して否定的であり、産地外から全ての原材料を入
手してきた産地は原材料の変化に対して柔軟な傾向にある。

産地と原材料の関係について、約半数にあたる10ヶ所の産地に
おいて産地内の材料が変化していることが分かった。そのうち、
成立時から指定時までに変化した産地が3ヶ所(結城紬、江戸和
竿、本場黄八丈)、指定時から現在までに変化した産地が5ヶ所(房
州うちわ、笠間焼、江戸切子、益子焼、江戸指物)、成立時から指
定時、指定時から現在までともに変化している産地が2ヶ所(桐

生織、春日部桐箆筥)ある。

また、産地が変化した材料のうち、中間生産物は11種あり²⁰⁾、
原材料は30種(草・樹19種、土・石4種、鉱物3種、動物2種、
その他2種)あった。後者に関しては産地内で工芸品とつながり
を持っていた原材料が作り出していた景観の消失を招いていると
考えられる²¹⁾。

土・石や鉱物などは持続的な資源でないため、現存する原材料
の採掘とともに質の近い代替品の調査や搬入の支援が求められる。
一方で、草・樹や動物など持続可能な原材料に関しては、産業と
しての伝統工芸を維持していくためにはより安価、もしくはより
良質の原材料が必要になる場合もある。しかし、その場合でも一
部であれ産地内での調達を復活させ、伝統的な地域とのつながり
を目に見える景観として復原させることは伝統工芸の存続や景観
の保全に資すると考えられる。具体的には、産地の意識に即しな
がら、労働者となる職人や環境に対して以下のような支援の方向
性が挙げられる。既に使用しなくなった産地内の原材料に関し
ては、それを加工する技法を携えた職人の技法を絶やさぬように、
早急に労働環境を整えて後継者の育成を図り技法を継承してい
かなければならない。同時に、原材料となる植物を安定的に利用可
能なまでに生育するには一般に長い時間を要するため、長期的な
支援が必要となる。また、産地における一次産業と二次産業の連
携を密にしていける必要がある。

謝辞：本研究にあたり、財団法人大林都市研究振興財団の平成21
年度奨励研究助成を受けた。記して謝意を表します。

補注及び引用文献

1) 山口知恵、松本将一郎、西山徳明(2009):子鹿田焼の里皿山における伝統的な生
業の持続と文化的景観の保全に関する研究:日本建築学会計画系論文第74巻第
644号、2215-2222
2) 篠卓郎、石垣良弘(2006):歴史・文化・風土を活かした地域づくりとランドスケ
ープ技術:ランドスケープ研究第70号、24-27
3) 大西隆(1980):地場産業都市における地域開発の課題:都市計画学会論文第15
号、133-138
4) 玉井明子、久隆浩(1999):地場産業都市における観光活動設計とまちづくりに関
する研究-愛知県常滑市栄町を事例として-:都市計画学会論文第34号、355-360
5) 戸田和宏、渡辺貴介(1997):伝統的工芸品の観光の活用手法に関する研究:都市
計画学会論文第32号、271-276
6) 北村嘉行(2006):工芸産業の地域:原書房
7) 井上秀次郎(2004):地域活性化のための地場産業研究:唯学書房
8) 上野和彦(2007):地場産業産地の革新:古今書院、41-51pp
9) 上原三知、重松敏則、朝野景(2005):都市近郊里地・里山林の保全・活用による
潜在的生産力とその循環型地域モデル:ランドスケープ研究第68号、545-550
10) 原幸爾、武内和彦:長野県佐久市を事例とした地域循環型の生物資源利用シス
テムに関する研究:ランドスケープ研究第67号、741-744
11) 財団法人工芸品産業振興協会(2007):全国伝統的工芸品総覧:同友館
12) 申出書には、工芸品名、用途、製造工程、使用される材料・道具、製造される地
域並びに製造業者数及び従業者数が記載されている。
13) 工程図は以下の定義に基づいて作成した。①申出書の詳細な工程に従う②各工程
をまとめる大項目がある場合はそれに従う③平行して行う工程は並列して表す④工
程と使用される原材料及び中間生産物を線で結ぶ⑤産地の境界線を記入する。
14) 一般的に産業の分類形態には「垂直的分業」と「水平的分業」の2つのタイプが
あることが指摘されている。また、中小企業金融公庫調査部が行った調査「地場産
業の変容とそこに生きる中小企業の対応(2003年2月)4-5pp」でも、地場産業の
分類について「垂直構造」と「水平構造」を分けて分析している。
15) 清成忠男(1980):地域社会と地場産業:日本経済評論社、113pp
16) 伊賀光屋(2000):産地の社会学:多賀出版、373-377 pp
17) 財団法人工芸品産業振興協会(2008):現代に生きる伝統工芸:ぎょうせい、
130-134pp
18) ヤシバシを採取する人がいなくなり、科学的に製造された大和液を代用してい
る。大和液の方が安く簡単に安定している。
19) イボタロウ虫は、パラフィンに代わり、ウツギは入手が困難となり高価になったため
に代用品としてミズメを使用するようになった。
20) 産地において中間生産物の生産がなくなることは、その生産技法の消失を意味す
ると考えられるが、その復活については稿を改めて検討する必要がある。
21) 例えば、笠間焼では、産土や石は有限であり枯渇することを考慮すると産地外の
代替品への転換もやむを得ない。一方で、施釉に用いる天然の木や藁や糞は高価に
なったために合成物で代用しており、木や藁を採取する山や田の風景、木や藁を燃
やして灰を作る風景が産地から消失したと言える。

表-6 産地成立期の原材料状況によるまとめ

I D	品名	産地組合の意識											
		産地成立時産地内原材料 ※1	企業数 ※2	従業員数 ※3	年産額 ※4	種類	工程タイプ ※5	原材料の数 ※6	中間生産物の割合 ※7	指定時以降の原材料の変化 ※8	産地外の原材料への志向 ※9	調達先の変化への柔軟性 ※10	産地外の原材料への志向 ※11
②	笠間焼	◎	◎	◎	◎	陶磁器	1	◎	▲	○	×	○	○
③	真壁石燈籠	◎	◎	◎	◎	石工品	1	▲	▲	×	×	×	×
12	本場黄八丈	◎	◎	▲	▲	織物	4	▲	▲	×	×	×	×
20	江戸からかみ	◎	▲	▲	▲	染色品	1	○	○	×	×	×	×
4	益子焼	◎	◎	◎	◎	陶磁器	1	◎	◎	▲	○	○	○
6	桐生織	◎	◎	◎	◎	織物	2	▲	○	○	×	○	○
7	春日部桐箆筥	◎	▲	▲	▲	木工品	1	○	○	○	×	○	○
14	東京染小紋	◎	▲	▲	○	染色品	2	▲	○	○	×	○	○
5	伊勢崎餅	◎	▲	○	○	織物	2	○	○	×	×	○	○
10	房州うちわ	◎	▲	▲	▲	竹工品	1	○	○	○	×	○	○
11	村山太島紬	◎	▲	▲	▲	織物	3	▲	○	×	×	×	×
23	鎌倉彫	×	○	○	○	木工品	1	◎	◎	◎	◎	◎	◎
16	江戸指物	×	▲	▲	▲	木工品	1	◎	◎	◎	◎	◎	◎
17	江戸和竿	×	▲	○	▲	竹工品	1	◎	◎	◎	◎	◎	◎
18	東京銀器	×	◎	◎	◎	金工品	1	◎	◎	×	×	○	○
21	江戸切子	×	○	○	○	その他	1	◎	◎	○	○	○	○
22	江戸木版画	×	○	○	○	その他	2	▲	○	×	×	○	○
23	小田原漆器	×	▲	▲	▲	木工品	1	◎	◎	×	×	◎	◎
25	箱根寄木細工	×	▲	○	○	木工品	2	◎	◎	×	○	◎	◎
15	東京手描友禅	×	○	○	○	染色品	1	▲	○	×	×	○	○
11	結城紬	×	○	○	○	織物	3	▲	○	×	×	×	×

※1 ①全てが産地内の原材料 ○一部に産地内の原材料 ×産地内の原材料なし
※2 ①100企業以上 ○50-100企業 ▲50企業以下 ※3 ①500人以上 ○100-500人 ▲100人以下
※4 ①10億円以上 ○5-10億円 ▲5億円以下
※5 1垂直型 2垂直+α型 3水平型 4垂直水平併合型 ※6 ①20個以上 ○10-15個 ▲10個以下
※7 ①80%以上 ○20-80% ▲20%以下 ※8 ①変化あり ×変化なし
※9 ①変化してもよい ▲一部の原材料が変化してはいけない ×全ての原材料が変化してはいけない
※10 ①原材料の調達先は変わってもよい ○原材料が同じであれば変わってもよい ×変わってはいけない
※11 ①是非利用したい ○どちらかと言えば利用したい ×利用したくない